



TITLE:

摘録

AUTHOR(S):

CITATION:

摘録. 地球 1926, 5(6): 568-570

ISSUE DATE:

1926-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183109>

RIGHT:

摘 録

○小澤儀明、長門二疊石炭紀石灰岩の古生物學的層序學的研究 第二部 古生物、東京帝國大學理學部紀要、第四十五冊第六編、大正十四年(Paleontological and Stratigraphical Studies on the Permo-Carboniferous Limestone of Nagato, Pt. II Paleontology.)

長門秋吉臺の石灰岩中に見出した化石は植物三動物は有孔虫六十八種珊瑚十二種藤虫五種腕足貝二種あり。特にフズリナ科有孔虫はすでに知られたる殆總ての屬が(唯ガーティナとバレイカフズリナをのぞきて)出でたので著者は精密に調査の結果其分類にしてすてに行はれたるものに多少の改訂を加ふる必要を感じた。

フズリナ亞科に三屬あり。

Staffella (新屬、基型 *Fusulina sphaerica* Möller)

Neofusulinella Deprat

Fusulina Fischer

此屬の亞屬として *Fusulinella* Möller, *Schellwienia*

Staff-Wedelkind, *Schwagerina* Möller, の三を答ふる

フメルベークナ亞科は次の如くに分たる。

Doliolina Schellwien 本屬に二亞屬あり。

Doliolina *verbeekina* Staff である

Neoschwagerina Yabe 亞屬は四あり

Cancellina Hayden, *Neoschwagerina*,

Yabeina Deprat, *Sumatrana* Volz.

有孔虫として新種として記されたものは *Tetraxis* Schellwien, *T. linea*, *Spirulina grandis*, *Fusulinella itoi*, *Staffella mölleri*, *S. yobarenensis*, *Schellwienia staffi*, *S. yobarenis*, *S. edensis*, *S. kaerimizensis*, *S. deprati*, *S. haydeni*, *S. subobsoleta*, *S. ominensis*, *S. suzuki*, *S. satoi*, *S. oblonga*, *Neoschwagerina douvillei* (フズリナ科に属するものとして) *N. (Yabeina) hayasakai*, *Y. shiraiensis*, である。日本に普通知られたるものとして秋吉に出るものは *Schellwienia japonica*, *Schwagerina princeps*, *Verbeekina verbeeki*, *Doliolina lepida*, *Neoschwagerina craticulifera* 等である。

珊瑚には *Lonsdaleia enormis*, *L. katoi*, *L. yokoyamai*, *L. gerthi* の四新種。次に *Nagatophyllum* なる新種である。ロンドンタイプに近い *N. satoi* の一種である。

Polyscoelia japonica なる新種もある。藤虫には *Fistulipora lotoi*, *F. nagatoensis* の新種がある。以上の報文印刷中にユラニ氏のフズリナ科に就ての論文發行されたので著者のフズリナ、ドブラチは *F. douvillei* Coladi に先取された事になつた、またヤバイナ、シライエンスは同ハヤサカイの二種はドブラのマルセペタ種である事が分つた後記がある

○矢部長克、清水三郎、天草の上部白堊紀に出た鸚鵡貝の一新種 (A new species of Nautilus from the upper Cretaceous of Amakusa, Jap. Jour. Geol. Vol. III, No. 2, 1924 pp 42-43, pl. v.) 學術研究會議の報文、長尾學士が天草の姫浦層群の海成頁岩中に採取したる直径二百十一耗の大形の鸚鵡貝にて、著者等は之に Nautilus (Gymatoceras) pseudo-atlas といふ新種としての學名を與へた。此種は英、佛の白堊に出る N. (C.) atlas Whiteaves に近似してゐるが肋が貝の側面で二分しある事により判別し得らる。タガスカル産にて Boule, Lemoine 及 Thevenin 三氏が N. elegans Sowerby なりしたるものも本種に甚近くて N. (C.) madagascarensis の新稱を以て呼ぶべきであらう。(横山)

○佐伯四郎、丹波のジュラ紀三角貝新種 (On some new species of Jurassic Trigonia from Province of Tamba, Japan, 地質學雜誌第三十二卷三十五頁以下大正十四年) 著者は丹波天田郡中夜久野村日置にてジュラ紀砂岩層中に Trigonia hegiensis といふ T. Yeharai の二新種を發見した、記載と圖版が出てゐる(寸法が測定してなく、第二種の記載は簡單にすぎ、また近似種との比較が述べられてないのは遺憾である)(横山)

○犬吠岬の漣痕、臨水鐵五郎千葉縣犬吠岬のリップルマーク史蹟名勝天然紀念物第一集第二號二九—三二頁寫眞三(十

摘録

五年二月) 臨水鐵五郎日本で稀に見る標式的地層面のリップルマーク地理教育三卷六號五二—五二五頁圖版付(十五年三月)

從來漣痕の成因に就いては水面に於て起る波の起伏運動が水底の砂面に波狀の起伏を生ぜしめたものであると説かれて居たが、ハーマン(Hahmann 一九一二年)は水や風が砂又は泥の表面を流れるとき兩層の間に起る摩擦の爲めに漣痕が出来るのだと説いた。而して下層の砂には底流の方向に對して直角に走る波形を生じ、波丘の斜面は底流に直面した側が緩くこれに反した側が急になる。成因上漣痕は淺い水底に出来る、即ち數米以下の深さの水底に限ると云つてよいが稀には百尺位の深さの所にも出来る。之れから推論すれば漣痕を有する地層は淺海又は淺湖に出来たものである。漣痕の保存されて居る地層は砂岩と珪岩とであるが地層の年代には關係はない。

歐洲では獨逸の下部斑砂統の漣痕が著名であり、米國では原生界、泥盆系、三疊系の各地層に其の例がある。滿洲では先寒武利亞界の珪岩に著しく大連の南の老虎灘の海濱に露はれて居る盤狀珪岩中のものは能く知られて居る。鞍山站、遼陽の東方及安奉線福金嶺に露はれたる同時代の珪岩にも漣痕がある。日本内地では對馬の中生層砂岩及銑子半島の白堊紀砂岩に漣痕があることが報告されて居る。

銑子半島に於ける漣痕は犬吠岬の南側にある二箇所の石切場に於ける三角介砂岩中にある。第一の場所は犬吠岬の脚部

雲元

六七

に近く臺地の上にある大な石切場の南寄で、漣痕は波丘間の距離が一寸八分乃至三寸五分、波丘の高さ二分乃至三分で波頭は可なり尖つて居り波丘側の傾斜は普通のもの、様に一方に緩で他方に稍々急である。波丘は規則正しく數十條の平行列となりて地層面の走向北五十度西と同じ方向に走つて居る尚ほ其の層面には植物の小枝や葉の炭化した化石が附着して居り、其の地層が沿岸堆積層であることを明示して居る。

漣痕を観察した第二の箇所は前の石切場から約四五町東に當つて犬吠岬の東端に近く丁度燈臺の南の斜面に開坑した石切場である。こゝでは砂岩の間に帶黑色の薄い粘土層又は粘土交りの砂層が多く夾まつて居り、層向に沿つて砂岩層を剥すに必ず漣痕が現はれる。この漣痕は前のより稍低くて高さ一分乃至五厘、波丘間の距離は一寸五分乃至二寸、波頭は前のほど尖らず、又波丘頭は多少屈折して必しも直線狀をなさず、従て波丘列は互に平行してゐない。又波丘列の方向は層面の走向に一致せず走向に對し或角度をなす。總ての状態は前の石切場にあるものよりも稍深い水底で稍弱き流れによつて出来たものであるのを示す。

本論文には老虎灘と犬吠岬との漣痕の美しい寫眞版が附隨して居る。私共は嘗て矢部博士が地質學雜誌第十五卷第一百七十四號(明治四十一年三月)公にされた朝鮮慶尚南道晉州附近の侏羅紀砂岩中の美しい漣痕や北海道空知附近の第三紀砂岩中のものゝ寫眞に加へて今こゝに好き地學資料を加へ得たことを喜ぶ。因に云ふ、朝鮮では晉州の漣痕の外に

平安南道价川郡外東面倉洞里で矢部博士と摘録者が同行の際に三疊紀(?)の帶綠色砂岩中に漣痕のあるのを矢部博士が大きな落石で發見されたことを記憶して居る。著者は犬吠岬の漣痕を天然紀念物として指定保存されんことを望んで居られるが天然に露出せる化石と同様に標本として室内に幾分かを保存して置く方が實は天然物の保存になるのは明亮なことである(S)

新 著 紹 介

○西洋又南洋

理學博士 山崎直方著

四六版本文四七五頁圖版三十二葉、發兌元東京市外西大久保古今書院 定價三圓二〇 大正十五年二月發行

山崎博士の歐、兩米、濠洲の三大洲に跨がつた世界の旅の獲物を一般の日本人に分配して下さらうとするこの美しい本、そして讀み易くて知らず識らずのうちに讀者をして地理學的智識に富まして了ふ本を手にして紹介子は何んな風に地球の讀者に御奨めしたらよいか考へざるを得ないのである。博士は近年「我が南洋」を公にされて我新領土の變つた天然の美しさを明かにされた。我國の地學者によつて著される旅行記の甚しく乏しい間に「西洋又南洋」となつて大きく咲いたこの花は南洋の潮の香よりもより高い匂ひを放つてゐる。紹介子の一人の知己は一夜にして感興の湧くにまかせて讀了したとい